

感動新聞 平成23年4月号 発行者 細川栄一

皆様、元気ですか？ 3D活動（出来る人が、出来ることを、出来る限り）やりましょう。
ビジネス経営の最前線で頑張っておられる方の役に立つ情報となればと思います。喜んで頂ければ幸いです。

歴史の教訓

米国の歴史家、アーネスト・メイの「歴史の教訓」にこんな言葉があります。

「政策形成者（Policy makers）は、通常、歴史を誤用する」

我々は、自らの都合のいい歴史にのみ、今直面している課題との共通点を見出しがちだ、
ということでしょう。

ちなみに彼は、米国がベトナム戦争の泥沼から抜けられなくなった理由として、「歴史」の影響を
指摘しています。

第2次世界大戦であれだけ中国に肩入れしながら、共産化によって全く果実を得られなかった。
だからあくまで北ベトナムを倒そうとした、と。

歴史を学ぶには、広い範囲を、公平な解釈に基づいて知っておくことが望ましい。

でも実社会で忙しい方には、なかなかそこまでの時間がないですね。

ならば、こんな一言だけ覚えておくというのはいかがでしょう。

変革期について歴史から学ぶなら、

いつ、誰が、何を「捨てたか」を考えるのです。

歴史上の体制の変革とは大抵、「どうやら、この制度の下では貸した金は戻ってこないぞ」と思っ
た人が現れた時から始まります。

「どうせ返ってこないなら、崩してしまうか」

と考えた人が、時代を動かすに足る人数に至ったタイミングで、誰でも何がしか持っている自分の
既得権を捨て、「崩される側」から「崩す側」に飛び移った人だけが、次の時代に生き延びた。

明治維新もこの枠組みで説明してみましよう。

江戸時代は天保年間の頃から、武士階級という「公」に対して、豪商、富農といった「民」がお金
を貸し付けることで、経済が動いてきました。

その間、頻繁に借金棒引きが繰り返され、さらに黒船が登場したことで「もうこの体制には返済能
力がない」と、多くの人々が江戸幕府を見切ります。

その結果、明治維新につながる。

大変革をリードしたのは、旧来の制度を超えた抜擢などで、武士階級の既得権をいち早く手放した
グループだったことは、ご存じの通りです。

彼らが作った明治政府は、幕府から引き継いだ負債（豪商らからの借り入れに加え、藩士たちの俸
給など）の相当部分を踏み倒し、その犠牲の上で、地租（税収）に基づく収入に見合った財政支出
で再出発します。

歴史はそのままの形では決して繰り返しません。

でも、変革の原動力として共通するものはある。

それを探し出すのが、歴史を学ぶ本当の面白さなのですね。

ここで、ちょっと、今の私たちを振り返ってみるのも面白いでしょう。

「政府に貸したお金は返ってくる」と信じているか、否か。

あなたの判断はいかがですか？

答えによっては「捨てる」覚悟を、固めた方がいいかもしれません。

（歴史家・東京大学教授加藤陽子談 日経ビジネス 2010年2月号より）

この文章は本質を突いています。

既存の蓄積したものや考え方を、捨てる覚悟をした人が、変革出来るのです。

つまり、運命の開拓には、出逢いを活かすことです。

喜捨の効果、執着の放棄となります。

（詳しい説明は、思想・哲学を学ぶとよく理解出来ます）